

第50回超音波ドプラ・新技術研究会臨床報告集

萃点からの転換

ソナゾイド造影超音波とCT所見に乖離がみられた肝腫瘍の1例

1) 東京医科大学病院 消化器内科、2) 福井大学 放射線科

和田卓也¹⁾、高橋宏史¹⁾、杉本勝俊¹⁾、尾崎公美²⁾、掛川達矢¹⁾、高橋宏史¹⁾、
富田裕介¹⁾、阿部正和¹⁾、吉益 悠¹⁾、竹内啓人¹⁾、糸井隆夫¹⁾

肝内多発腫瘍で紹介された50歳代女性。造影CT検査では典型的な転移性肝腫瘍を疑う所見を認めるも、ソナゾイド造影超音波検査では非典型的な所見と乖離を認めた。本症例の経過と乖離の要因を考察し報告する。

A woman in her 50s was referred to our hospital for multiple intrahepatic masses. Contrast-enhanced CT scan showed typical findings suspicious for metastatic liver tumors, but contrast-enhanced ultrasonography showed atypical findings and discrepancies. We discuss and report the course of this case and the factors contributing to the discrepancy.

症例

50代、女性。健診の腹部超音波検査で肝内に多発する腫瘍を指摘されていたが医療機関を受診されず、半年後腹痛などの症状が出現したため当科受診・入院となった。

既往歴：高血圧、脂質異常症

内服歴：テルミサルタン、ヒドロクロロチアジド、アムロジピンベシル酸塩、ロスバスタチンカルシウム

家族歴：特記すべきものなし

嗜好品：飲酒は毎日 日本酒1~2合、喫煙なし

身体所見：

意識清明、体温36.3℃、血圧 130/75mmHg、脈拍 85/分・整腹部所見は平坦かつ軟、上腹部に自発痛を認める。

血液検査：WBC 9,100/ μ L、Hb 12.7g/dL、

AST 41U/L、ALT 27U/L、CRP 1.5mg/dL、AFP 7.3ng/mL、PIVKA II 74mAU/mL、CA19-9 60.5U/mL、CEA 792ng/mL

肝臓ダイナミックCT検査：動脈相にてRing状の濃染、遅延相において漸増する濃染から転移性肝腫瘍を示す所見を認めた。

腹部超音波検査：Bモードで内部が充実部分と一部無エコー域の混在した腫瘍を認めた。Colorドプラでは腫瘍内に血流も認めた。

腹部造影超音波検査：血管相にて腫瘍内部に屈曲蛇行する多数の太い血管と腫瘍全体の不均一な染まりを認めた。2分後の画像でも造影剤が腫瘍内に残存し、血管の染まりを認めた。Kupffer相で腫瘍血管内に再灌流するバブルが散見された。

肝腫瘍病理所見：HE染色で腫瘍細胞が結合して胞巣状に増殖している所見を認めた。免疫染色ではcytokeratin AE1/AE3とp40が陽性であった。

上部消化管内視鏡検査：胸部食道に1型

進行食道癌を疑う所見を認め、生検を施行した。

食道腫瘍病理所見：HE染色にて角化傾向を呈する腫瘍細胞がシート状に増殖しており、食道癌の診断となった。

入院後経過：病理結果から進行食道癌、多発肝転移の診断となり化学療法(FP療法+Nivolumab)を開始した。化学療法にてCTCAE grade3の食欲低下も出現した。減量投与も勧めたが緩和療法を希望され、診断より102日後に永眠された。

考察

本症例は造影CT検査では典型的な転移性肝腫瘍を疑う所見だが、ソナゾイド造影超音波検査では腫瘍内に血管構造を強く認め典型的な転移性肝腫瘍の所見ではなかった。ソナゾイド造影超音波検査と造影CT検査にて所見の乖離を認めた